



物語  
オーストラリアの歴史

200781114 山田拓斗

# 1章

オーストラリアは1901年、六つの植民地が連邦国家として一つになり誕生した国である。

オーストラリアと一般的に呼ばれるようになったのは、20世紀になってからの事である。



オーストラリアの国旗は、南十字星、七綾星にユニオンジャック（イギリス国旗）が合成されている。

オーストラリアの主権がイギリスに属することを意味している。



## 2章

白豪とは、「白人のためのオーストラリア」を意味しており、オーストラリアは人種差別政策を、国家政策として初めて導入した国である。

アジア系労働者や中国人の定住化を前に、多くのオーストラリア人が、合意できた解決策として、彼らを締め出す、白豪主義が実現した。

### 3章

オーストラリアがまだ植民地であった19世紀には、ヨーロッパ各国が南太平洋の国に興味を持ち始め、世界分割競争に翻弄されることとなる。

当時オーストラリアは、南太平洋諸国はイギリスが領有すべきであり、他のヨーロッパ諸国は進出すべきではない。とする「太平洋モンロー主義」をスローガンとして掲げたのである。

その後もイギリスへ忠誠を誓い、植民地拡大やロシアの南下を防ぐため、イギリスへ兵を送り貢献し続けた。

その後のボーア戦争ではペストを含め、大量の死者がでることとなり、賛否は別れオーストラリアへの「国益」はなんなのか？と考えるようになる。



## 4章

1902年に日英同盟が結ばれることになり、オーストラリアにとっては、ロシアの南下政策による出兵の仲間ともなるため大きな影響があった。

その後オーストラリアは新日となり、日露戦争中の1904年には日豪パスポート協定が誕生する。

パスポート協定とは、日本人が商業・教育・観光の目的で、オーストラリアに入国することを認めたものである。

この後も日本とオーストラリアの交友は続き、日本を貿易相手として、神戸に通商代表部を開設したり、日露戦争に軍馬を輸出したりと良好な関係を築き上げていった。

## 5章

第二次世界大戦後の国際秩序と国連構想が、米英などの大国だけで行われたことにオーストラリアは不満を抱えていた。

そこで、ニュージーランドと協力し、ANZAC協定を結んだ。このANZAC協定はカイロ会談から除外されたことへの不満を表明するものであった。

このアンザック協定は三十六か条からなるが、特に重視したのが、南太平洋地域の安全保障に関して、オーストラリアとニュージーランド両国が、主たる責任を有するという点である。

これにより、大国の関与を阻止し、さらにアンザック協定は後の南太平洋委員会の元ともなり、とても重要なものである。

## 6章

現在のオーストラリアは、多文化ミドルパワー（中規模の国家）の国家像をもつ。

20世紀以降には白豪主義に決別し、アジア系の移民の受け入れ、アジア人を抱える多文化社会へと変貌していった。

（多文化主義の側面）

白豪主義決別のほぼ同時期に、大国政治への参画を断念し、総合的な国力からみて中規模の国家が歩むべき独自の道を探し始めた。

（ミドルパワーの側面）

オーストラリアの自画像は、ようやく多文化ミドルパワー国家として現れたが、いまだ完成しておらず、その作業は今でも続いている。

終わり